

今号は50号記念として、当館の将来への展望と、今まさに進行している6つの活動について紹介します。

博物館が博物館でありつづけるために

さいとうやすじ
斎藤靖二（館長）

だれもが親しく楽しむことのできる博物館や美術館は、「集める」・「調べる」・「伝える」という地味な仕事で支えられています。このことは博物館や美術館が生まれたときから変わっておりませんし、これからも変わることはないでしょう。集められるものには、自然からの標本資料や考古資料や人類がつくってきた美術・工芸品（コレクション）、および文書記録（アーカイブ）があります。しかし、それらは無目的にむやみに集められているわけではありません。私たちが、どこからきて、どこへ行こうとしているのか、そんな私たちの記憶と歴史を実証しながらより良い未来を目指して、それぞれの館が独自の目標を設定して蒐集の努力を続けています。

コレクションもアーカイブも、どれをとっても人類が共有する貴重な財産です。それらはさらに発見が期待される研究素材ですから、将来にわたって伝えていく必要があることはいうまでもありません。このような仕事を社会的に分担できる場所は、博物館や美術館のほかにはありません。私たち皆のコレクションがいかに大事であるかは「伝える」活動である展示からうかがい知ることができます。展示は、博物館や美術館でなければできない独特の表現手法ですから、魅力を伝えて感動してもらうためにいろいろ工夫がこらされます。

生命の星・地球博物館は、自然と人間がともに調和して生きていくことをテーマに活動している自然史博物館です。皆さんが自然に親しむ手がかりとなるように、常設展示では、初期地球のころにはじまり、生命の誕生から発展していく歴史、現在の生物がいかに多様性に富むかまで、地球生命史の流れがわかるように展開されています。膨大な標本類の一部は、個別の分類あるいは話題ごとに、実物百科事典のようなジャンボブック展示に活用されています。そして、学芸員による総合研究や経常研究の成果は、特別展または企画展として公開されています。今年の特別展は「ナウマンゾウがいた！～温暖期の神奈川～」(7月21日～11月4日)で、藤沢市から産出した化石にもとづいて、約13万年前の温暖期を中心に展示がなされています。2年前には

「+2℃の世界～縄文時代に見る地球温暖化～」と題する企画展もなされており、神奈川県から得られた資料から、地球規模の環境変動が読みとれることを紹介してきております。ぜひご覧になって下さい。

どの分野の特別展または企画展でも、何年にもわたる資料の蒐集蓄積とそれらの調査研究によって裏づけられています。しかし、毎日続けられている職員の裏方作業は見えませんが、一般に十分に理解されているわけではありません。とはいえ標本資料を継続的に蒐集することは、実はとても重要なことを教えてください。2002年から2005年にかけてなされた総合研究の成果をまとめて、昨年「神奈川県レッドデータ生物調査報告書2006」を刊行しました。それは、ほぼ10年前に刊行したときの報告書と比べてみると、県内から多くの野生生物が絶滅していること、さらにいくつもの生物が消失するおそれがあることを明らかにしています。博物館活動は、国も機関も場所も関係なく、だれでも参加して協力連携して進めることができるのが特徴ですが、この報告書も館独自の研究成果に加えて、外部の多くの研究や団体に協力していただいでできたものです。調査研究への協力にはじまり、資料の標本化や整理、情報化といった作業、そして普及活動など、博物館活動はボランティアと友の会による多岐にわたる活動によって支えられています。私たちは、自然・生物との共生になんらかの役割を果たすことを望みながら、途切れることのない記録をとり続けていきたいと思っています。

しかし、楽しい博物館も運営についてはいまや冬の時代といわれています。社会的な不景気の影響を受け

て、維持運営するのが困難になっているからです。博物館活動にも市場原理主義を導入して、行政・経済の効率化をはかろうとする動きがあります。そこでは、経費削減、人材有効活用といいいながらの人員削減、職員の意識改革、受益者負担などの検討がせまられています。しかし目的は経費削減ですから、管理が行き届かないことからおこる不十分な安全対策、施設設備の老朽化、サービスの質的低下といった問題がでてきていることも確かです。入札による指定管理者制度では、長期的な展望・計画をもてないままに収益事業が重視される傾向があり、本来の博物館活動を支える土台が軽視されて、人類がこれまで蓄積してきた文化や伝統が消失するおそれがあると心配されています。また、現在進められている公益法人改革や博物館法の改正にともなって、博物館の収益事業と公益性なども検討されています。公益性のない博物館なんてあるはずがないと思うのですが。

未来を担う子どもたちに、私たちはどんな博物館を残したらよいのでしょうか。やはりボランティアや友の会および多くの協力者とともに、「集める」・「調べる」・「伝える」という仕事ができる博物館ではないのでしょうか。博物館が博物館であり続けるためには、そのどれも欠くことができません。博物館は、そんな地味な活動のまわりに、たくさんの友だちが集まってくる楽しい場でありたいと願っています。

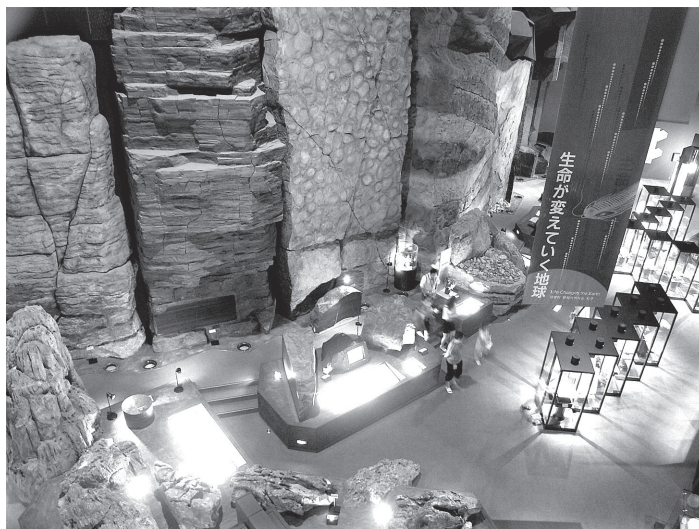


図1 ボランティアによる展示解説。